

水曜日の恋人

A y a m e e' Y u

龍田よしの

Yoshino Tatouta

termity



エタニティ文庫

目次

七章	十六章	十五章	十四章	十三章	十二章	十一章	十章	九章	第八章	序章
シャボン玉	嫉妬	火花	時計	ゲーム	マンホール	出逢い ^{であい}			夢のかけら	
145	123	97	81	50	34	6				4
	終章	十三章	十二章	十一章	十章	九章	第八章			
		イミテーションナイト	招待状	台風	宣言	対決	痛み			
	331	294	272	243	221	195	168			

序章 夢のかけら

「思うようにいかないのが人生だ」
 いつだってそうだった。
 そんなことは知ってるつもりだった。

普通に生まれて普通に育った。学校でも会社でも目立ったことなんて一度もなかった。平凡で穏やかな反面、憧れや理想は手の届かない、遙か遠くの輝きでしかなかった。運動会では三番か四番。文化祭では裏方。合唱祭では端っこで口パクして揺れているのが関の山。好きになった男の子はいつも自分以外の可愛い子と一緒にだった。だからって別に不幸な訳じゃないと自分に言い聞かせてきた。

四年前、彼に出逢って人生は変わった。初めて望まれてヒロインになれたのだ。彼の恋はどこか密やかで秘め事めいていたけれど、逆にドラマチックでわくわくした。堅実で地味な勤め先も彼との未来を思って選んだ。

やっとなつかんだ夢。とびきり頭がいいわけでもとびきり美人でもないけれど、すてきな人との出逢いで輝く人生。普通すぎる自分だけれど、彼となら悪くない。
 そう思っていたのに。

三ヶ月前にはころび始めた彼との関係。あいた穴を繕うためにあらゆる手段を講じて東京まで来て、なのに結局崩壊した。もはや決して取り戻せない夢。砕け散ったかけらをぼんやりと見ている。

やっばり望みは叶わない。ヒロインにはなれないの？
 好きだったのに。あんなに頑張ったのに。
 どうして。

「そもそも、思うようにいくわけもないのが人生だ」
 ずっとそう思っていた。無意識に諦めて納得していた。
 でも今は。
 そう言った誰かを殴ってやりたい。

一章 出逢い

初めて彼と迎えた朝は土曜日だった。

深い眠りは深海へ潜るのに似ている気がする。碧や深緑、そして黒。それらが混ざり合って溶けた中で自分が浮遊する、そんなイメージ。悪いものじゃない。逆だ。安らぐ。こういう眠りは滅多に訪れないのが悔しい。自分のことなのにどうしてコントロールできないんだろう。

凄く気持ちがいい。なんの不安もない。慰めるように髪をなでてくれる指。こんなに落ち着くのは久しぶりだ。そう、久しぶり……？

頭の中で警鐘が鳴った。本能が眼を覚ませと訴える。こういう時は従うべきだと経験からわかっている。彩芽は、いやいやながら意識を浮上させていった。眠りの海から現の空へ。

眼を開けた。まだ覚めきれない意識でとらえる白い天井と薄暗い室内。窓にかかるカーテンが強い日射しを遮断している。朝なのか昼なのか。

ぼんやりした眼が間近の腕をとらえた。五本の指がついている左腕はどう見ても自分ではない。筋肉質で頭の下に敷いてもしびれることのない腕を枕にしている。誰の？ 意識が現実と折り合わずに焦れる。

気づけば腰のあたりにも別の腕があった。ゆったりと彩芽の腹を包むように抱え込んでいる。背中にも人肌と体温を感じる。つまりベッドの上で誰かの左腕に頭を、右腕に腹を抱えられ、背中から誰かに抱き込まれているってことだ。いやな予感、じゃなくて実感に襲われながら、ともかく現状を把握しようとして彩芽はおそろおそろ身体をねじった。まず見たのは銀のピアスがふたつだった。耳たぶに星を光らせる男にあいにく見覚えはない。無造作に額にかかる焦げ茶色の髪。通った鼻筋。長い眉に閉じたまぶた、薄目の唇。小さな黒子は思わず指でたどりとくくなる。要するに整った顔だ。非常事態にも拘わらず彩芽はまぶたが開くのを期待した。人の顔は眼で決まる。どんなに綺麗な顔立ちも印象は眼次第だから。見たい。

神様のさまぐれか、いきなりまぶたが開いた。期待どおりの眼だった。月が照らす夜の海、銀の波の輝きが見えたのは錯覚だろうか。

魅入られた彩芽に現実には隕石レベルの衝撃で襲いかかってきた。

「起きたのか」

笑みを浮かべた顔が視界を覆う。唇に感触、つて……へ？ は？ あ。キス？

「きゃああああーっ！」

ようやく我に返った彩芽は相手を思いきり突き飛ばした。百メートルも離れようとする勢いだったが、ベッドの幅も長さも百メートルあるわけがなく。飛びすさって背中から床に落ちかけたところを男は苦もなく引つ張りあげて抱き寄せた。逃げた腕の中にまた囲われたわけで、……まぬけだ。

「つぶねえ。何やってんだか」

言葉ほどあわてていない、どちらかというと面白がっている声だった。気づけば相手も自分も裸だ。全身の触覚が目覚めてくる。

「やつ、は、離して」

恥ずかしいやら焦るやら逃げたいやら、まさにパニック状態。闇雲ぐみくもに暴れても相手はびくともしない。

「わかつたつて。また落ちるぞ。落ち着け」

「そんなこと言ったつて」

「忘れてるのか。そんな気はしたけどな」

「は？ 何を」

「俺の顔、わかるか？」

とりあえず彩芽をシートでくるみながら男は聞いた。わかるならこんなにあわてたり

しないのに。

「昨夜のこと、どこまで覚えてるんだ？」

彩芽は混乱した思考を必死で立て直そうとした。

おぼろに浮かんでくる泡のような記憶。

そう、昨夜。落ち込んでいた彩芽は職場の先輩に誘われて、初めて「ホストクラブ」なるところへ足を踏み入れたはずだった。

六月に入ってから彩芽の落ち込みは尋常ではなかった。四年越しの夢がつぶれたら誰だつてそうなるだろうと思うものの、さすがに勤め先でも人目を引いていたらしい。柚池彩芽は派遣社員だ。中堅アパレル商社の経理課に所属している。まだ新米しんまいもいいところ。

東京へ出てきたのが四月。あらゆることに慣れなくて緊張した毎日。おまけに心はいつもほころび始めた夢の繕つくろいに飛んでいた。とはいえ勝手に飛び出してきたから親には頼れないし、預金はあるものの手をつけたくない。だから派遣に登録してすぐ仕事に就けてホッとした。気もそぞろながら早く慣れようと仕事中は必死になった。新しい勤め先は派遣社員が多く、そういう意味でも助かった。

そして二ヶ月。やっと仕事にも人にも慣れ、派遣先でも気軽に呼んでもらえ始めた頃。

わずかな希望にすがっていた彩芽の夢はとうとう消えた。プライベートを仕事で出すべきじゃないとわかっていても、のしかかる這い上がれないほどの絶望感。よほど目立っていたのだろうか。可愛がってくれる正社員的那智理恵子に声をかけられたのだ。

「彩芽ちゃん、遊びに行かない？」

「遊びに？」

鬱な心をなんとかしたいのは山々だったが気が重い。そんな彩芽に理恵子は声を潜めて聞いた。

「ホストクラブって興味ある？」

「ホストクラブ、ですか？」

さすが東京。まずそう思った。ホストクラブなんて田舎ではまずお目にかかれない。あったとしても普通のOLにとっては別世界で行こうなんて思えない。一体どんなところなんだろう。久しぶりに湧いた好奇心を理恵子はしつかり読みとったようだ。

「OK、行くわね？ 金曜だし今夜がいいな。軽く食事して映画でも見て、それからね。初めてならたいしてお金もかからないし。奢るわよ。ちよつと飲みに行くと思えばいいの。じゃ終業後に」

テキパキと決めて仕事に戻った彼女に、彩芽はもう一度感心した。理恵子は切れる。彩芽が派遣された課では男女問わず一番だ。頭が良くて美人で気さくで気つぶがよくて。

「江戸っ子の美人」をそのまま体現したような感じだ。着物を着せたらきつとよく似合うだろう。

湧きあがるコンプレックスを彩芽は仕事で食い止めた。せつかくの厚意だ。職場ぐらいは楽しい方がいいし、せめてもの救いと思いたい。

終業後に理恵子と落ち合った。どうしてすぐ行かないのかと思ったが、理恵子によればそのホストクラブは開店時間がかなり遅めらしい。ふたりでイタリア料理を食べたあと映画を見た。コメディで久しぶりに笑った。それからようやく目的地へ向かう。

「先輩はよく行くんですか？」

抑えようとしても顔を出す好奇心。これまで自分の周りにホストクラブの経験者はいなかったし。

「よく行くってほどじゃないけど、落ち込んだ時なんかいいのよ。何しろ美形がかしずいてチャホヤしてくれるんだから」

「やっぱり美形ですか」

「基本はね」

と理恵子は笑う。

「好みがあるから取りそろえてますって感じかな。でもこれから行くところはいろんな意味でレベル高いって定評があるの。私もそう思うな。レベルって顔だけじゃないのよ」

わかるようなわからないような、でもなんだかワクワクする。鬱うつな自分を押し隠し、彩芽は期待の風船を精一杯膨らませた。

歓楽街の裏にある洋館みたいな建物だった。ゴージャスでシックな門構え。安っぽさなんてどこにもない。ひとりじゃ絶対入れない高級な雰囲気ひんぎに彩芽は怯ひるむ。ドアを押し、理恵子について、気後れしながら入る。そのとたんだった。

「いらつしゃいませ」
綺麗にスーツを着こなした男性が出迎えてくれた。彩芽とさほど変わらない年頃うかだろうか。

「理恵子さん、お久しぶり」

「ちょっと仕事が忙しくてね。お詫わびに新しいお客を連れてきたわ。初めてだって」

「いらつしゃいませ」

彼は彩芽に向かって実に見事なお辞儀をした。中世の騎士がお姫様にする礼みたいで見とれる。

「理恵子さんの連れにしてはずいぶん可愛いね」

「ケイ、それは私が可愛くないってこと?」

「失礼」

軽口の叩き合いを双方楽しんでいるみたいだ。

「会社の後輩なの。このところ落ち込んでるみたいだから楽しませたいのよ。よろしくね」

「もちろん。ここでは誰でもレデイでプリンセスだから」

レデイ? プリンセス? キングやナイトもいるのかと彩芽は聞きそうになった。それくらいここは異次元に思える。

「アキラは元氣?」

「理恵子さんが来ないから拗すねてたよ」

「だと嬉しいけど」

「どうぞこちらへ。お連れのお名前は?」

答える前に理恵子が告げる。

「彩芽よ」

「この時期にびつたりの綺麗な名前だね」

ケイと呼ばれた彼は彩芽に向かって微笑んだ。花のாயメとかん違いしたようだけど、今はあやめ違いを訂正する余裕なんてない。気分は魔法使いに杖を振られて変身したシンデレラさながら。

「あやめさん、『マンホール』へようこそ。楽しんでいただけれることをお約束しますよ」
かくしてホストクラブ『マンホール』へ彩芽が足を踏み入れたのは、金曜の夜だった。

店内はおとぎ話に出てくるお城の大広間を思わせた。ふかふかの絨毯^{じゅうたん}。高い天井にシャンデリア。落ち着いた色の壁紙にはアールヌーボー調の絵がいくつか。高級そうなソファが一面に広がり、姫ならぬお客と、騎士ならぬホストが優雅にさざめいている。「ふたりともこちらへ」

案内されるままにソファの間を抜けその一角に導かれた彩芽だが、自分には分不相応な気がして落ち着かない。

「せんばい〜」

心細そうな彩芽に理恵子がカラカラと笑う。豪快^{ごうがい}だ。

「何死にそうな声出してるの。面接試験じゃないのよ。ここはクラブ。あなたはお客。お金払う側なんだから威張ってなさい」

そんなこと言われたってと思う間にひとりのホストが現れた。肩までの茶髪と甘いマスク。柔らかな微笑が印象的だ。理恵子の声まで甘くなる。

「アキラ。ごめんね、ご無沙汰^{ぶさた}して」

「忘れられたのかと思ったよ」

アキラと呼ばれた彼は差し出された理恵子の手に軽くキスしながら、茶目^{ちやめ}つ気をこめて睨^{にら}んだ。ドキリとする仕草だが理恵子はあっさり流す。

「しょうがないのよ。繁忙期^{はんぼうき}に入っちゃうとね。あ、この娘^こ」

理恵子が彩芽を振り返る。うなずいたアキラの挨拶はよどみない。

「彩芽だね。『マンホール』へようこそ。俺はアキラ。理恵子のご指名だからよろしく」

ここの人達は毎日笑顔の訓練をしているんだろうか。魅惑的な微笑^{みほ}みに見惚^とれながらも、彩芽は聞き慣れない言葉にとまどった。

「あの、指名って？」

わからないことはさっさと聞くに限る、これは彩芽の知恵だ。

「大抵のホストクラブがそうなんだけど、お客は何度か来たあとに、店のホストの中で一番気に入ったホストを『指名』するのよ。そうするとそのホストが専属のエスコート役になるの」

「必ずその人が相手してくれるってこと？」

「基本的にはね。アキラみたいに人気があるホストだと必ずってわけにはいかないけど、それがお約束ってわけ」

理恵子の横、彩芽の斜め前に座ったアキラも説明に加わる。

「指名したホストが忙しい時は、ちゃんとヘルプが入るから」

「ヘルプ？」

「その日限りの助っ人かな。そこで別のホストとも知り合いになれるから、喜ぶ客もいるわよ」

ホストクラブにもいろいろ約束事があるんだなと感心する。

「あたしみたいに初めてだったら？」

アキラがにっこりする。目の保養だ。

「好みのホストを決めるまでは自由にできるよ。今日みたいに初めての日は特に、ホストがみんな挨拶にくる。選ぶのはお客様だから。楽しんでもらえると嬉しいよ」

しばらくしてお酒が運ばれてくると、アキラの言ったとおり、ホスト達が入れ替わり立ち替わり現れた。テルにヨウジにタカヤ、マサシにナル、それから……。一体何人いるのか見当もつかないし、こんなにたくさん覚えられない。キョロキョロしている彩芽に理恵子が耳打ちした。

「バカ正直に全員覚えなくていいのよ。好みと思つたホストだけチェック入れときなさい。今日決めなくてもいいんだから」

なるほど、とうなずいた彩芽はさらに気づいた。あくまでも「次があれば」だ。今日は理恵子と来たから入れたけれど、ひとりでここに来る勇氣なんてない。だったら今夜限り。真夏じゃなくて梅雨の夜の夢だ。ガラスの靴を持たないシンデレラ。そう思うとぐつと気が楽になった。

鬱々を晴らしに遊びに来たんだから楽しめばいいのよね、うん。

気を楽にして良かったのか悪かったのか、そこから彩芽はテンションを上げた。お酒

はそんなに強くないのに、ホスト達はあたりまえながら勧め上手で、ついついペースが速くなる。お酒と一緒に口もすべりだしたあたりで、また新顔が現れた。理恵子が嫌々良く迎える。

「ユウじゃない、相変わらず余裕ね」

「それは理恵子さんでしょ。相変わらずしゃっきりした美人だ」

的確な表現だと思ひながら、ユウと呼ばれたホストを彩芽は見た。酔つた眼に映つたイメージは銀のオーラを放つ黒ヒョウだ。アキラとも、さつき顔を出した店のトップだというトオルとも違う。美形ってだけじゃない、隠している爪を感じさせる。興味津々の彩芽の視線もあつさり受け流す。

「君があやめ？ 『マンホール』へようこそ。俺はユウ」

みんなと同じ台詞なのに受ける印象が全然違う。微笑みは口を歪めただけで皮肉っぽく、一歩間違つると小馬鹿にしているともとれそうだが、悔しいくらい魅力的だ。彼は店のナンバー2だという。理恵子の言葉をふと思ひ出した。「レベルって顔だけじゃないのよ」。確かにそうだ。お客の扱いも丁寧で優しいし、話もうまい。現れるホストはどれも美形だが、個性たつぷりで千差万別。その中で彩芽が一番惹かれたのが、ユウの皮肉っぽく口を歪めた笑みだったのはどうしてだったのか。

二時間後、彩芽はかなり酔っていた。お客を楽しませる彼らの話術は、彩芽など簡単

に天国にいる気分させられる。甘やかして慰め、持ち上げて誉めそやす。酒もすすむというものだ。

時間が遅くなるほど店内は込んできた。増えた客から指名がかかったホストが次々と席を外す。そんな中でも理恵子はアキラといい雰囲気だったと思う。

「……ねえ、何かお金の使い道って知らない？」

彩芽がふと口にした問いに、たまたま隣で答えたのはユウだった。そんな簡単なこと聞くなと言いたそうな顔で。

「宝石とかブランド品買えば簡単だろ」

「残るものはいやなの」

「海外旅行は」

「ひとりじゃつままないでしょ」

「食べ歩く」

「だからひとりじゃ」

「なんでそんなに使いたいんだ？」

彩芽は黙る。理由はあった。今すぐにでもその金全部を燃やしてしまいたいほどの理由が。別のホストが挨拶に来たので話は切れた。

「へえ、可愛いね。あやめちゃんって言うんだ」

新しく加わった彼はレンと名乗った。とても優しい雰囲気でおまけに凄く美形だ。彼の背を覆って流れ落ちる黒髪。心の奥に押し込んでいた鬱^{ふさ}が溢れ出すのがわかった。何故こんな時に。こんな楽しんでる時に思い出すの？ ううん、わかっている。あの時垣間見た彼女も流れるような黒髪だったから。とうとう彩芽は泣き声をあげた。

「せんばーい、あたしふられたんですよ」

「え？」

少しは予想していた理由だろうが、突然泣きついてきた彩芽に理恵子もびっくりしている。自分でもやめときなさいと思ったが舌は勝手に言葉^{ことば}を紡ぐ。

「四年つきあってた人に」

「四年も？ あなたいくつだっけ」

ユウがちらっとこっちを見たような気がした。

「二十二です」

「十八からずっと？」

アキラも驚いている。

「高校三年の時に知り合って。結婚する約束もしてたのに」

「婚約ってこと？」

「親は知らないんだけど」

と彩芽は口ごもる。

「なのに彼、急にいなくなつて。探し当てたら別の彼女がいて別れてくれたって」「えー?」

レンが言葉を探している。どう聞いても騙された女だろうな。そんな彩芽の思考におつかぶせるように冷たく響いた声。

「永すぎた春の果てに捨てられたつてわけだ」
人を氷河期へと突き落とさんばかりの台詞だ。その場にいた全員の視線がユウに集中した。彩芽の顔から血の気が引く。この人いつもこうなんだろうか。

「ユウ、そんな言い方は失礼だよ」

レンが眉を上げ、たしなめた。

「言葉飾ってどうする。本人が一番わかっているさ」

確かに否定はしないけど、だからって。

「わかっているなら余計に言われたくないものよ」

彩芽の気持ちを代弁するかのように理恵子が睨んでもお構いなしだ。苛立ちで彩芽の唇が突る。

「慰めるのが普通でしょ」

「ろくでもない男だなんて?」

苛めっ子みたいな口調がどうしてこうも魅力的なんだか。

「……彼の悪口言わないでよ」

「ふられてまだ未練があるんだ」

口を歪めたいやな笑い方が棘のように彩芽の胸に刺さる。

「四年もつきあつたらしょうがないわよ」

理恵子が懸命に庇ってくれるが、ユウは一向に退かない。

「引きずるよりさっさと新しい恋でもすれば。恋愛は長さじゃない。心が全てでもないだろう」

「新しい恋? 氷河期ブリザードな気分の中の真直中で恋なんてできると思う?」

「ブリザード脱出なんてすぐだ。相手を好きじゃなくてもいいし」

意味がちっともわからなかった。困惑する彩芽に彼は挑み続ける。

「必ずしも気持ちには必要ないってことさ」

「好きにならなきゃ始まらないでしょ」

「そうとは限らないぜ。もっと簡単な方法もある」

彩芽はやけになつていた。お酒が全身の血管を巡らしてもいいだ。

「そこまで言うならその、簡単な方法っての教えてよ」

わずかに残った気力で睨んだ。一応客なんだから答えは聞かせて欲しい。笑ったユウ

の眼は何か企^{たくら}んでるに違^{ちが}い^なかつたけれど、低い柔らかな声はビロードみたいに気持ちよくて。

「いいぜ。身体から始めてみるか？ 新しい恋を」
そこで記憶は切れていた。

戻ってきた現実。思い出した。この人はホストクラブ『マンホール』のナンバー2、ユウだ。思い出したけれどこの状況は、何？ 彩芽の焦りは減るところか三倍、四倍増しになる。

どこだかわからないがここはホテルだろう。高そうなダブルベッド。ダブルなんて初めて、じゃなくて、彼と自分が一条まとわぬ姿でそこにいるわけは？ どうしよう、どうなってるの。

理性は現実を理解しようとしているのに、感情は激しく抵抗している。何より眼のやり場がなかった。だつて裸だ。

彩芽の表情を読んでいたユウは、彼女が思い出せることは思い出したと判断したらしく再び笑った。昨夜の記憶と同じいやな笑い方が彩芽の気持ちさをさくくれ立たせる。

「現状認識、した？」

死にかけて魚みたいにバクバクと空気を求めていた彩芽の口から、やっと言葉が飛び

出す。

「してないわよ！ なんであたしがあなたと、それも素っ裸なの！」

くっくくくと彼の肩が揺れた。色気も素っ気もないのはわかっているが、こんな状況、受け入れられない。自分は失恋ドツボ、ブリザードで凍死寸前だったのに。

「どこまで記憶にあるんだ」

ユウはシートに覆われた彩芽をつかまえたまま、暢^{のんき}気に煙草を吸い始める。それが様になるから困る。細身なのに力のある腕の筋肉すら、色っぽくて顔がほてる。なんとか逃れようとしても無駄な抵抗、となるとおとなしく答えるしかない。

「ブリザードの脱出方法を聞いたあたりまで」

「なんだ、覚えてるじゃん。だからこうなったわけ」

「……は？」

三段論法どころじゃない。今のは百段ずつ飛ばしてる。その「だから」で、ここから月までひとつとびだ。論理が飛躍しすぎて説明になってない。

「脱出方法が、これ？ これって」

「セックス」

切れ長の眼がニヤッと細くなる。聞くのもいまさらだが。

「………したの？」

「全然覚えてないのか？ 結構燃えてたくせに」

「やっ、やめてええー！」

彩芽は再びシーツをかぶって突っ伏した。夢であって欲しかった。夢じゃないことはわかっていても。

服を着たい。でなきゃ話もできないという彩芽の懇願にどうか離れてくれたユウだが、ベッドを下りる彩芽から楽しい視線を外そうとしなかった。

「あ、あのね、あっち向いてよ」

「いまさら？ 服ならその椅子の上」

「わかったから」

いまさらと言われても、彩芽にすれば彼はまだ見ず知らずの男と同じだ。許容量を超えて飲んじゃいけない。日本海溝並みに深く反省しながら睨みつける。やれやれといった風情でユウが背中を向けるのを待って、服を抱え込んだ彩芽はダッシュでバスルームへ飛び込んだ。

ついでにシャワーを浴びようとして、鏡に映った自分の裸に思わず釘付けになった。

ぐえっと喉で蛙が鳴いたような声がある。胸に腹に腰に、振り返ると背中にも鮮やかな赤い痕がいくつも。一瞬で沸騰した彩芽の頭に、霧のような記憶が甦った。細く

て長い指。大きな手。サラサラの髪感触。それから唇。それらが認めたくない事実を彼女につきつけ、さらに散らばった赤い印が駄目押しする。

怒っていいはず。っていうか本来泣くべきところじゃない？なのに。残っているのは砂糖菓子みたいな後味ばかりだなんてどうかしてる。

なんとか服を着た。幸い見えるところに痕は残ってないようだ。意図的だとしたらとても彩芽が太刀打ちできるレベルではない。泣いてもいいですかと誰かにすがりたい。

バスルームを出ると彼も着替えていた。ジーンズなのは何故だろう。昨夜はスーツだったのに。そりゃあ白いシャツも似合うけど。椅子に座って煙草をくゆらせる横顔。ピアスが光った。最初に眼についた銀のピアスは黒ヒョウの牙みたいで綺麗だが、そう思うのも悔しい。ユウは彩芽を見てニッと口の端を上げた。

「いくつあった」

「え？」

「数えなかつたか？」

「あ、あ、あなたねえええ」

確信犯だ。とつさに枕をつかんだ彩芽に、もう一度ユウが投げた言葉。

「見る。ブリザード脱出も簡単だろ」

手が止まった。

「今のあんたがブリザードの中なら、常夏の島もブリザードだって」

そう言いながらまた新しい煙草に火をつける彼。彩芽は井戸をのぞき込むように、自分の感情をまじまじと見直した。決して立ち直ってない。痛みが消えたわけでもない。でもあの鬱、どうしようもなかったマイナスの塊が消えているのも確かだった。そんなバカな、ほんとにこれが脱出法？ 出逢ったばかりの男と寝ることが？ 渦巻く疑問をどういうわけか彼は正確に読みとっているらしい。

「言つたろ？ 身体から始めてみればいいって」

意味がわからない。身体から、何を。

「あんたは四年も大事に温めてたものを無くして、氷河期ブリザード状態だったよな。でもさ、恋愛は長さや心で決まるとも限らないだろ」

「……好きだっていう気持ちよりも？」

「身体から始めるってことで。相性はいいみたいだぜ、あんたと俺。どう？」

めまいがした。ここは日本、相手は日本人で言葉も日本語なのに、こうも理解できない言葉があるとは。純真無垢に生きてきたつもりはないけれど、少なくとも好きな相手が出て、それを第一に行動してきたこの四年間。大事なのは気持ち、そう信じてたのに。他でもないその好きだった人に世界をひっくり返された上、大きな鬱に吞み込まれ溺れかけていた自分が、身体から始めようなどと涼しい顔で吐く出逢ったばかりのホスト

とのセックスで、鬱から抜け出そうとしているなんて。曲がりなりにも二十二年、自分の中でつちかかってきたものは何だったのか。情けなさすぎる。

こつちを窺っていたユウが煙草をもみ消したのにも気づかなかった。自分の葛藤に意識を埋没させていた彩芽は、抱きしめられてぎよっとする。なんでまた？ 耳元に響くのは覚えのあるビロードのような声。

「どうしようもなく真面目にやってきたんだろ、あんた。それでうまくいかなかったんだから、今度は不真面目にやってみれば？ なんとかなるもんだぜ」

意地悪でも皮肉でもない、諭すような声。いやなはずの抱擁が心地いいなんて。

「不真面目にやるって、誰とでも寝るってことなの？」

「いや、ゲーム」

「ゲーム？」

彼の言葉はやっぱり理解できない。

「気持ちじゃなくて、身体から恋を始められるかどうか、試してみれば？」

「無理だと思っ」

「ゲームだと思えば、勝っても負けても楽しめるだろ」

腕の中から見上げると、ユウは不敵な笑みを浮かべている。怖いくらい強気な。

「考えるよりやつてみる方が早いぜ。とりあえずイントロに入っちゃったしな。はいこれ」
差し出されたのは名刺だ。『クラブ マンホール 天川 右生』とある。

「そこにあるのが俺のケータイの番号。先を続ける気になったら連絡しろよ。改めて説明してやる。もちろんやらなくても構わない。あんた次第」

顎をつかみ唐突にキスを落とすと、嘩然とする彩芽を後目に彼は扉を開け、するりと部屋の外へと消えていく。

「ホテル代はいらぬ。縁があつたらまた、な」

ドアが閉まった。取り残された彩芽ときたら、頭は疑問符の渦、身体には赤い痕、唇にはキスの感触。全て彼の置きみやげだ。確かに鬱からは掬い上げられたのかもしれないが、実はもつとんでもないところへ放り込まれただけの気もする。

混沌の中で彩芽は戦闘態勢に入っていた。黒ヒョウみたいなホストの誘いに乗りたい、そう思っている自分自身と。

月曜日は雨だった。会社への道すがら、眼に留まった紫陽花が自分の心のように思える。あまりにも定まらない色模様に舌打ちしたくなるほどだ。

出勤した彩芽は真っ先に理恵子を探した。いつも早い彼女はすでに自分の机で仕事の準備している。

「先輩、こないだは」

「彩芽ちゃん？」

理恵子は彩芽を見るや大急ぎでお手洗いに連れ込んだ。彼女にしては珍しいくらいあわてている、そのわけは。

「あのあとどうした？一緒に帰ろうとしたんだけど、あなたちつとも聞かなくて」

「……先輩、あのお」

彩芽はおそるおそる問う。

「あだし、半分くらいしか覚えてないんですよ。一体どうして……ああなったんでしよう？」

情けなさそうな彩芽の顔を見て、理恵子は額を押さえた。頭が痛くなつたのかもしれない。

「やつぱり無理にでも連れて帰るんだったかな」

「せんばい〜」

「ああ鳴っちゃった。お昼一緒に食べよう、その時話すから」
始業チャイムが流れた以上、他に術はなかった。

待ちかねた昼休み、オフィスのエレベーターからどつと吐き出される人波に彩芽

と理恵子も混じった。傘の花が咲き乱れている。雨の日のオフィス街もこの時間だけは華やかだ。理恵子の希望で、お昼にしては高めのレストランを選んだ。その分ゆっくり話せる。

「途中までは覚えてるんです。右生と口論したあたりまで」

モグモグ口を動かしながら話す彩芽に、理恵子はため息をつく。

「口論ね。あれはユウが指名で呼ばれて、席を外したから中断したのよ。でもあなたったら、ガンガン飛ばして、帰ろうとしなくて」

記憶が途切れたあとも飲んだのか。そんなに強くもないのに、とフォークの先の鶏肉をぎろっと睨んでみる。

「もともと落ち込んでたし。憂さ晴らしならいいかって止めなかったの。そしたら看板まで居座っちゃって」

初めてのホストクラブで？ ああ、反省の深さをマリアナ海溝レベルまで修正しよう。この大バカ者。睨まれて恐れをなしたようにトマトソースを滴したらせる鶏肉を一呑みにする。理恵子の話は続く。

「ホストクラブってホストの帰りをみんな狙ってるのよね。お持ち帰り目当てで」

それはつまり？ 彩芽のナイフとフォークが再び止まり、顔が真っ赤になった。

「ユウとかアキラは人気があるからなかなかつかまらないんだけど、人気あるから逆に

本人次第なのよ。新人みたいに言いなりでもなく」

ホストも大変なんだなと同情、してる場合じゃなかった。彩芽は少々自棄やけ気味で、付け合わせの野菜をぐさぐさと刺しては口に放り込んでいく。

「なのに、ユウったら私達のとこに来て言ったわけ。こいつは俺が持ち帰るからって」

「……はあ？」

開いた口がふさがらなかった。なんだそりゃ。こっちの意思は無視か。

「閉店まで居たお客の中にはユウ目当てがそりゃあ多かったわ。常連だっていたのよ？ なのにあなたときたら、ブリザードの簡単な脱出教えてやるよって言われて、行くう、って即答よ」

差し伸べられた彼の手にあっさりつかまったという。子どもみたいに。

「あんまり素直だから、止め損なっちゃったのよ」

すでに食後のコーヒーを待つばかりだったテーブルに、彩芽はべたりと突つ伏ぶした。狼に飛びつく赤ずきんちゃんの図だったというわけだ。食べてくださいと言わんばかりじゃないの。

「ごめん。私も珍しくアキラがいいよって言うから、つい」

理恵子は両手を合わせて謝るけれど、彼女にだって都合はある。酔ってるとはいえ、それほどはっきり意思表示されたら止められまい。

「先輩のせいじゃないですよ」

はつきり言って自業自得。とはいえ、後悔で深く海底へ沈んでいきそうだ。テーブルの向こうから理恵子がのぞき込んでくる。

「やっぱりそうだった？」

「いまさら聞きますか」

「……そう、よねえ」

ゆつくりと椅子に寄りかかりながら、理恵子はと言おうかと迷っているようにみえる。

「珍しいのよ、ユウが自分から相手するのって。良くも悪くも淡泊で、お客に逆らったりきついこと言ったりするのを私は見たことなかったの。あ、いい？」

喫煙席だというのに彩芽に断り、理恵子が煙草と一緒に取り出したライターは細身の銀色円筒形だ。

「私も何度か看板まで居たことあるけど、ユウだったらいつの間にかいなくなっちゃうことも多くって。ただでさえ人気があるから、帰りにつかまることなんて滅多にないみたいよ。」

ろうそくみたいな筒の先の火でつける煙草。紫煙がゆらゆら立ち上る。

「アキラの話だと、ホスト同士でははつきりものを言うらしいけどね」

「あたしがよほど癪かえんに障さわねったとか、苛めたかったってことですか？」

慥然ぶぜんとした彩芽の問いに、理恵子は首を振った。

「そうじゃなくて。あれがほんとの彼なのかなって」

「ほんとの？」

「素顔。チラッとだけどね」

どういう意味かと聞き返す前に、コーヒーとデザートが運ばれて話はそれきりになった。白いお皿に盛り付けられたチョコケーキとカラフルなマカロンを味わいながら、雑談のかたわら彩芽は考え続けた。

彼の言ったゲームとは何だろう。どうしてあたしに構ったんだろう。

彼は一体、どういう人なんだろう？

問いが積もるばかりで答えはひとつも見つからなかった。

二章 マンホール

土曜日、右生が目が覚めたのは夕方だった。寝過ごしたと部屋を飛び出す。

週末の歓楽街はにぎやかだ。なんだかんだいっても平日より週末に遊びたいというのが常人の思考で、ホストクラブも例外ではない。にも拘わらずギリギリの時間に店に入った右生に、声をかけてきたのはケイだ。

「珍しいね、あなたがすべり込みとは。キャッチでもしてた？」

「……俺がするように見えるか？」

「見えないな。必要だった頃もやらなかったよね。態度でかくて」

嫌味のない笑いをクスクスと漏らすケイは、ホストの割に人がいい。上にはなかなか上つていけないが、それを苦にするタイプでもない。性格の可愛さでしっかり顧客もつかんでいて、上らないが下がりもしないマイペース派だ。右生より年下だがウマも合う。

「トオルの客が『枝』を連れてくるらしいよ。新人達がどよめいてる」

指名客に連れてこられて、指名ホストが定まっていな客を『枝』と呼ぶ。つまり新規の客獲得のチャンスだ。

「最近、景気悪いからな」

「ユウもちよつとは本気出せばいいのに。トオルくらい抜けるでしょ。その気があれば」

「その気がない奴はトップに向かない。俺は現状キープで満足さ」

さらつと流した右生はネクタイを締め、髪をかき上げた。

「そろそろ行こうぜ」

開店時間が迫っていた。

『マンホール』はこの界限では名の売れたホストクラブだ。メンツも粒ぞろい。お客をあくまで淑女として遊ばせてくれると定評がある。遊びに来る客も落ちるお金もそれなりのレベルの高さだ。

今、店のトップはトオル。めきめきと台頭した彼はつい三ヶ月前、それまでトップだったアキラを追い落とした。以来トップを維持している。長身でがっしりした体格に短髪。構えがちなブランドスーツをサラッと着こなす優雅な身のこなしと素っ気ない態度、それでいて甘い台詞をささやくのが持ち味だ。

トオルに追われたアキラは、対照的に綺麗な茶髪と甘いマスク。柔らかな微笑で客を魅了する。聞き上手で、客をにぎやかにするのが得意だ。トップから追い落とされれば次点になるのが普通だが、アキラは三位に甘んじている。『マンホール』には二年間も二位をキープしている男がいたから。

それが右生だ。店では「ユウ」とカタカナで通すのはみんなと同じ。だが彼の存在は、店のホストの誰にとっても驚異だった。がむしやらさがなく欲や押しもない。そのくせ抜け目もない。トップだったアキラが落ちても二位の座は渡さないあたりにそれは窺える。余裕があるのだ。

長身で、クセがあるのにサラツとした髪。場合によっては酷薄そうに見える目つき。歪めるように笑う口元。ホストだから媚びを売らないわけではないが、やりたくないことはやらない。やりたいようにしかやってないようで、しつかり客をつかんでいるから不思議だ。右生が本気になればトップもとれるだろう。誰もがそう思っているが、彼にその気がないのも知っている。上昇志向の強い奴が集まるこんな場所でのらりくらりと泳いでいる右生は、多くのホストにとって目の上のたんこぶだった。実力主義の世界だから誰も口に出さないだけだ。

トオルとユウとアキラ。この三人が今の『マンホール』の看板だ。彼らを含めて『ナイト』と呼ばれるランキング十位までの強者。その下の中堅、さらに成り上がりを夢見る新人も加わって、訪れる淑女を魅惑の微笑みで迎えてくれる。

午後十時。店内に灯がともると、ケイの情報どおり、トオルの指名客が初めての客を連れてきた。あつという間にホスト達は戦闘態勢だ。それはそうだろう。大抵のホストクラブは指名制をとる。客は何度か来たあとに、一番気に入ったホストを自分のその店

でのエスコート役に決めるのだ。以後、来店のたびにそのホストへ指名料が入る。一度決めたらまず変えることはできない。ホストの変更はホスト自身の稼ぎやプライドと密接に関わるから。故にホストは指名を取るため、あらゆる努力をすることになる。初めての客はなんとしても獲得したい。ホストクラブへ行つた客が下にもおかぬ姫様扱いをされたあげくはまってしまうのは、指名制における彼らの闘いが原因だ。ホストクラブの罠といえるかもしれない。

自分の指名客についていたユウが控え室に戻り休んでいると、トオルのところにヘルプでついていたケイが顔をのぞかせた。雑談ついでに聞いてみる。

「どうだ? 『枝』の客は」

「まあ、普通かな。ホステスらしいから狙い目ではあるね。あなたもあとで顔出しておいでよ」

「トオルがうるさい」

「関係ないよ。挨拶は常識」

ケイの、顔に似合わぬシビアな口調に右生が苦笑する。こういうところが面白い奴だと思う。

「あとでな」

体のあいた右生が他のヘルプに代わってトオル達のテーブルについたのは、それから

十分後だった。初めての客には店中のホストが顔を見せに来ることになっているから、トオルも顔をしかめこそすれ何も言わない。座りながら右生は決まり文句の挨拶を唱える。

「ようこそ『マンホール』へ。俺はユウ。よろしく」

こんなしゃべり方が許されるのは右生ならではだろう。客にはもうちょっとかしずくようにと、店からは要求されているのだが。

「ラッキー。私、あなたとお話したかったの。さっきからかっこいいなって」

はしゃぐ客を、なるほど扱いやすそうだと右生が値踏みする。こういうタイプは乗せやすい。トオルが右生を軽く睨む。反対側にいたアキラがニヤツとする。トップ3は駆け引きしながら微妙な均衡を保っている。

「名前は？」

「早智子です」

「リサちゃんと同僚には見えないね。リサちゃんが大人っぽいからかな」

「あら、ありがとう。でも慣れてないだけよ、きつと」

トオルの指名客、リサはすまして微笑んでいる。彼女もホステスだが、あつさりした性格はホストに好まれやすい性格といえる。トオルの今のお気に入りだ。それから約一時間、彼女らの席は入れ替わり立ち替わり挨拶に来るホスト達でにぎわった。早智子は

すつかりその雰囲気気が気に入ったようで、彼らに携帯番号を聞かれると困ったフリをしつつ教えてやったりしていた。右生が途中で指名客に呼ばれ、席を外した間に彼女達は腰を上げた。

「今日は早智子を連れてきただけだから。また遊びに来るわ」

リサが甘えるように言うと、営業スマイルでトオルが応える。

「待ってる」

「楽しんでもらえたのかな？」

出口へ向かう通路で、右生がひょいと早智子をのぞきこんだ。早智子が眼を輝かせる。

「楽しかった。思ったよりお金つかからないのね」

「正直だね。忠告しとくけど、こんなに安いのは初回だけだから。といつてもうちは明朗会計だし、一、二万あれば結構遊べる。気に入ったならまた来いよ。楽しみにしてる」

「早智子、行くわよ」

リサの呼ぶ声に彼女はあわてて出ていった。

「さすが。あれはハマツたね、落とすつもりもないくせに」

いつの間にかケイが後ろで笑っている。

「人のこと言えないな。おまえも全然人の上に行こうって気がないじゃん」

右生があきれたように言う。

「それでもないけどね。あなたと争うようなバカはしないよ」

「やれやれ」

「余裕じゃないか？」

と、トオルが皮肉な視線を流して通り過ぎる。アキラはすでに自分の指名客の相手をしていた。店内はいつでも火花が散っている。それがまたホストを駆り立て、客へのサーブスにつながり、客をさらにホストに執着させる。ホストクラブはどこもこういう展開なのだが、ここはそれがより優雅に、ハイレベルに行われているのが魅力と言えた。

「『マンホール』へようこそ」

歓迎の挨拶に迎えられたその客は、場をぱつと華やかにし、大いに注目を浴びた。

「右生を」

「了解です」

最敬礼しながら受けた指名は瞬時に伝わる。忙しさにも拘わらず三分後には右生は彼女の隣に居た。そっけない口調で、だが親しげに声をかける。

「久々じゃん」

「忙しかったのよ」

「彼氏でもできた？」

「出張ばかりで家にも帰れなかったわ」

「そりやお疲れ」

「そうよ。慰めて頂戴」

「女王様のご所望じゃ断れない」

右生の差し出すグラスを受け取るのは、栗色の髪をうねらせた魅惑的な女性だ。

「遼子さん、ようこそ」

「しばらくだね」

「逢いたかったよ」

自分の指名客でもないのに、砂糖に群がる蟻のごとくやってくるホスト達を、鷹揚に彼女は迎える。

「みんな、元気だった？ キングはいないの？ しょうがないわね、任せっぱなしで」

周囲から注がれる羨望も嫉妬も一向に気にしない。たとえ指名ホストが忙しくてその場になくてもテーブルでいくつもの注文を入れて、本来はあり得ないがヘルプのホストへも色をつけてやる。彼女を筆頭にそんな博愛主義的常連が何人もいるのがこの店の強みで力だ。

そして午前六時、朝の光が溢れる時間に『マンホール』の灯は落ちるのだった。

電話が来たのは火曜日だった。

閉め切つてあるカーテンの隙間から、暗い室内に光が刺さる。蛇が鎌首をもたげるような姿勢でそれを眺めていた右生はくわえていた煙草をもみ消した。眠る彼女の横から抜け出し、シャワーを浴びて着替える。音を立てない慣れた仕草だが、そのタイミングで彼女が眼を覚ますのもいつものとおり。

「もうお昼？」

「ああ。帰る」

「近々誰かの誕生日じゃなかった？ トオル？」

ウェーブのかかった栗色の髪をかき上げ、毛布からのぞく豊かな胸を隠そうともしない彼女。

「たぶん」

なんとも気の乗らない返事を受け止め、彼女がフツと笑う。

「なんだよ」

「いい加減に自分をどうするのか、少しは考えれば？」

「どういう意味だ」

「今のままで満足なの？」

「なんだよ。トップをめざせとか？」

右生が口の端を歪めて笑う。

「それもあるけど……いいわ。このままで文句があるわけじゃないし」

「ならいいだろ」

言い切る口調が少し強い。

「またな」

「ええ」

あつさり向けられた背中。彼女の微笑はドアが閉まつてから少し翳^{かげ}つた。

「つかまらないわね。誰にも」
小さくつぶやくと、彼女はもう一度毛布をかぶつて横たわる。さつきまでそこにいた彼の姿を思い浮かべながら、シートに指をすべらせて眼を閉じた。

二重セキユリテイの高層マンションを飛び出した右生は太陽を睨んだ。なんでこんなに天気がいいんだか。左右を眺めて気分が右へ折れた。どっちへ行つても同じ。繰り返して過ぎていく毎日。特に文句もないが期待感もない。喜びも悲しみもどこかへ置いてきたようだ。

小腹が空いた。コンビニでサンドイッチを買って、近くの公園で食べることにする。

広くて木陰も多いここは、昼食に訪れたOLやサラリーマンでにぎわっている。ベンチはいっぱいだから、奥まった場所の植え込みの蔭かげに座り、サンドイッチをかじって炭酸飲料で流し込んだ。味なんてどうでもいい、詰めるだけ。そんな食べ方だから速攻で終わる。食べるよりもよほどゆったりと時間をかけて煙草を吸いながら、宙を見上げた。

まだ梅雨は明けてないはずなのに、仁義を知らない太陽が夏の刃やいばを剥むいている。日射しは苦手だ。鬱陶うっとうしい。気づけば世間のランチタイムを過ぎていた。公園は人の波も引いて、無駄な空間だけがたっぷり残っている。そこに似合う自分も無駄に思えて腰を上げた。

自室に帰り着くと冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出す。ごくごくと喉のどを鳴らしながら、そのままベッドに身を投げ出した。空のペットボトルは床に落ちるだけ。夜までの時間は眠りを貪むさぼることに決めて、ずぶずぶと意識を沈み込ませた。

携帯の音で右生は目覚めた。店からじゃない。誰だ？ ぼうつとした頭でとりあえず出してみる。

「もしもし」

『あ、あのっ』

細い女の子の声だ。つながらない思考回路。

『あなた、右生？』

どこかでキャッチした子だろうか。聞き覚えがない。わからなければ聞いてみるだけだ。

「誰」

『あ、やめ』

あやめ？ あやめ。

……「あやめ」か。

目が覚めた。頭の中に埋もれていた名前を掘り出して砂を払う。本当に連絡がくるとはね。

『覚えてないんだ？』

声は静かに怒りを帯び始めている。

「いや。かけてきてくれたのが意外でさ。ゲームする気になったんだ？」

『ま、まだよ。こないだのあなたの説明じゃ何もわからないんだもの』

話を通じたのはいいが早合点されても困る。そんな焦りが声から読みとれる。

「で？」

右生は立ち上がりながら促うながす。

『もう少しちゃんと説明して欲しいんだけど。駄目？』

「いいよ。店に来るなら」

『お店に?』

彼女の唸る気配にもお構いなしに続ける。

「当然。連絡くれたってことは興味あるんだろ? 鬱は抜けたんだし」

うっと相手が口ごもる。携帯の向こうで赤くなってるんだらうか。面白い奴。

「いつ来る?」

『え? あ。……いつならいいの?』

「そりやお客さんなんだからそっちの都合次第だけど、水曜日がベストだね」

『明日?』

「客が少なめだから。俺の自由が利きやすいし、それに」

違和感を覚えた右生は言葉を途切れさせた。内部の事情を聞かせるなんて、これじゃ客じゃなくて身内にしゃべってるみたいだ。いくらゲームの相手とはいえ。

『……わかった、明日行く』

「OK」

それで切ってしまったのは面倒な気がしたから。人と話すのを好まない右生だ。それでよくホストが勤まるなど言われるが、しゃべればいいというものでもない。自己主張が強い奴ばかりの中で、逆にそれほど押しも欲も出そうとしない右生を好む客も多い。ふっと時計に落ちた視線。

「やっべえ。遅刻する」

遅刻はそのまま給料に響く。結構うるさく言われる。あわててシャワーを浴びに走った。キングに話を通さなきゃなと思った。

『マンホール』のオーナー兼支配人は「キング」と呼ばれている。

浮き沈みの激しい繁華街ですでに十年、店を高いレベルで維持してきたのは称賛に値することであり、いろいろな意味で名の通った男だ。

店のホストの誰よりも背が高く、しなやかな体つき。年齢不詳、噂ではまだ四十かそこらとか。外すことのないサングラスと短いひげがトレードマーク。凶太さと華麗さが同居する不思議な魅力。今でもホストを差し置いて、キング目当てにやってくる客がいるくらいだ。

焦った割に余裕を持って店に入った右生は、仕度をすませるとキングの部屋を訪れた。

低い響く声がノックに答える。

「右生か。入れ」

「失礼します」

部屋の中はシンプルだが、極上の家具類が並んでいる。それがキングらしい。

「どうした」

「悪いけど、またゲームを始めるかもしれない」
ソファに座りながら話しかける右生に、パソコンで帳簿をチェックしていたキングの、マウスを動かしていた手が止まった。キングラスを通して強いまなざしが向けられる。「『ラバー』がいたのか?」

「明日、来てみないとわからないけどな」

どこかいい加減な口調の右生を鼻で笑って、また画面に戻る。

「四ヶ月、五ヶ月ぶりか? もうやらないのかと思ってたぞ」

「そのつもりだったんだ。ついで」

「つい?」

「バカな奴がいたから」

バカは自分だと言っているようにも聞こえる。

「まあいい。明日来るんだな?」

「あやめって娘。二度目だ」

「わかった。自信はあるんだろうな」

「負けたことあったっけ」

「ゲームが始まると聞いたら、おまえの客がまたうるさくなる」

時計を見上げて右生は立ち上がった。

「彼女がのってくればの話。よろしく」

右生が部屋を出てから、キングはひとりごちた。

「負けてわかることもあるんだが。今度は一体どんな娘やら」

キングラスに隠れた視線の先は右生の消えたドア。そこに小さく開いている窓はマジックミラーで店内が見える。キングの思惑をよそに、準備に追われ、忙しく歩き回るホスト達。開店に向け『マンホール』には活気が溢れていた。